1. 昔は人前で話すことが苦手だったという渥美貴幸さん。今では伝えたい言葉が溢れ出してくる。
2.「藤の花が咲いたらホヤの旬」と言われる。取材当日はちょうど藤の花が満開だった。3. 渥美さん愛用のBluetoothスピーカー。

ザザーッと打ち寄せる波の音。港につなぎ止められた船は波に揺られてチャプチャプと音を立てている。午前3時25分、渥美貴幸さん（37）が軽トラックから姿を現した。普段は渥美さんより先に来て準備をしているはずの乗組員の姿がない。「あいつ来てねぇの？電話してみっか」と携帯電話を取り出す。「もしもし？やっちまったなー、ふふふ」。彼が港に来るまで40分ほどかかるが、二人で作業をした方が早く終わるので待つことにした。「従業員よりこいつの方が重要だな、寝坊しねぇし」と船で使うBluetoothスピーカーを手に冗談を飛ばす。前回、2015年9月号で渥美さんを特集したときは漁のお供はラジカセで、船には渥美さん一人だった。

## 東北食べる通信

2011年3月11日、大津波はここ、石巻市谷川浜を丸呑みした。

朝靄が湾に覆いかぶさる。寒暖差が激しくなる初夏特有の風景だ。

61軒あった家はほとんどすべてが崩壊し、40名以上が命を落とした。渥美さん自身も津波にのまれたが、流れていく屋根につかまって九死に一生を得た。一度は浜を離れたが、半年後に帰ってきてホヤ養殖を再開させた。震災前、宮城県はホヤの生産量日本一を誇り、その70～80％を韓国に輸出していた。韓国ではホヤの過密養殖により病気が流行し、国内での生産量が激減したため、日本から大量に輸入していたのだ。その韓国が、2013年に宮城県を含む太平洋側の東日本8県から海産物の禁輸を決定した。理由は言うまでもなく、福島第一原発の爆発事故に伴う汚染水の流出である。

ホヤの養殖は最低でも3年かかり、2014年が震災後初出荷だった。渥美さんはシーズンに先駆けてホヤの放射性物質検査を要請した。養殖ホヤとしては検体第一号だった。結果は検出限界以下であり、他の浜でも基準値を上回る放射性物質が検出されることはなかった。1年目は生産量が極端に少なかったため問題なく売り切れたが、翌2015年、浜はパニックに陥った。韓国への輸出を見越し、2012年に増産したホヤが出荷を迎えたのだ。ホヤは余り、値崩れを起こした。安くても売れれば良い方で、買ってくれる業者がつかまらなかった。浜では出荷を諦め、もう一年海の中に置いておくと決めた漁師も多かった。「この先、どうなっていくんだ？このままじゃホヤはひたすら余っていく……」。渥美さんは危機感を募らせていた。その窮状を聞きつけた弊誌前編集長・高橋博之は急遽特集を決めたのである。

ホヤは基本的には全量業者に販売する。各業者のトラックが港で水揚げしたばかりのホヤを引き取り、殻付きやむき身で東北地方を中心に流通させている。渥美さんは、急に全国の人に届けることになり戸惑ったが、「ホヤを食べたことがない人に食べてもらって批判から学ぼう」と腹をくくった。